

小学校における遊びによる学級経営・学習集団づくり[†]

堤 美香*・丸山 剛史**
壬生町立壬生小学校*
宇都宮大学教育学部**

概要 本稿は、栃木県内の小学校における遊びを大切にしたい学級経営・学習集団づくりに関する教育実践報告である。本稿では、筆者の一人（堤）が2010・2011年度に担当した第3・4学年の学級において、学級単位で、集団で遊ぶことにより、子ども同士の距離感が縮まり、仲間意識が生まれ、子どもたちにとって居心地のよい学級へと変化したことが記されている。

キーワード： 遊び、小学校、学級経営、学習集団、集団づくり

1. はじめに

本稿は、栃木県内の小学校における遊びを大切にしたい学級経営・学習集団づくりに関する教育実践報告である。報告のなかでは、栃木県内の学校における子どもの遊び経験の組織に関しても言及されており、県内の状況を窺い知ることできる。実践者は、小学校教員経験4年目の堤美香さんである。

堤さんは、子どもたちは遊びが好きであり、遊んでいると子どもたち同士の心の距離感が縮まっていくと感じ、遊びによる学級経営・学習集団づくりに取り組むことにした。

堤さんの勤務校では週1回、昼休みに学級単位で遊ぶ時間が設けられていたが、堤さんはさらに1回学級単位で遊ぶ機会を増やし、週2回、教師と子どもと一緒に遊ぶ時間を設けた。

そして、教師が働きかけるだけでなく、子どもが企画した遊びを行い、さらに遊びのなかで子どもたちが話し合う機会を設けることにより、子どもたちの意思疎通を深めていった。

2年間の取り組みを終えた段階でのアンケート調査では、子どもたちの学級満足度は100%であり、学級は子どもにとって居心地のよい場所となっていた。

近年、「学力低下」が言われ、学力向上が課題としてあげられ重視されるなかで、子どもの遊びが注

目されることは少なくなっている。子どもの遊びは、豊かな学習のための重要な土台とも言われ、子どもの遊びは学校での学習にとっても有意義であり、重要視される必要があろう。

この点で、遊びを大切に、子どもの遊びにおける自発性を活かし、子どもたちを組織していった堤さんの学級経営・学習集団づくりの取り組みは重要である。また、遊びを学級経営、学習集団づくりに活かしていく教育実践報告はめっきり少なくなっており、貴重でもある。

そこで、小学校教員として多忙な教員生活を過ごしているにもかかわらず、堤さんには教育実践報告を教育実践総合センター紀要に寄稿していただいた。

今後の学級経営・学習集団づくりの検討材料になれば、紹介者としては望外の幸いである。また、教員経験が浅く、学級経営に悩む若手教員の参考になれば、とも願っている。

2. 遊びによる学級経営・学習集団づくりに取り組んだ理由

現在（2012年3月）、私は4年生40名の学級を担任している。この学級が3年生の時も私が担任を務めており、幸運にも同じ学級を2年間担任することができた。学級の子供たちは、素直で明るく、活発な子が多い。子どもたちは運動が好きで、給食の残飯もほとんどない。

4年進級以降は、休み時間に遊んだり、日常的に会話をするグループが形成されつつあるが、固定化するわけではなく、グループ以外の友人とも遊んだ

[†] Mika TSUTSUMI*, Tsuyoshi MARUYAMA**:
Class and Learning Group Management by Play
in Elementary School

* Mibu Elementary School

** Faculty of Education, Utsunomiya University

り、会話をしたりしている。誰かが泣いていると必ず「どうしたの」と声をかける子どもがいて、誤ったことをしていると「違うよ。こうした方がいいよ。」とはっきり言い合える学級でもある。

学級の係の中には、子どもたちが自主的に作った演芸係もあり、オリジナルのお笑いネタを披露していつもみんなを笑わせている。

こうしたことが望ましい方向に作用し、毎月実施している生活アンケートでは、学校を毎日楽しいと思っている子どもはほぼ 100%であり、私自身も毎日とても楽しく過ごすことができている。

しかし、担任を任された当初から、このような雰囲気であったわけでない。人間関係づくりに課題があり、問題も少なくなかった。だからこそ、私は、もっと子どもたち一人一人が学級の誰とでも話せたり、困った時には声をかけ合えたりすることができる学級にしたいと思い、子どもたちの人間関係がよくなる取り組みをしようと考えた。特に、仲間意識を育てることを通して、互いの存在を認め合い、互いが高め合えるような学級づくりを目指すことを考えた。

そのために、まず全員が一緒になって遊ぶ活動を取り入れることにした。遊びは子どもたちが大好きな時間であり、遊びになると子どもたち同士の距離感が縮まっていく感じがするからである。そして、遊びを共に楽しむことによって、子どもたちの人間関係がよりよくなるのではないかと考えた。

ここでは、第3学年から第4学年までの2年間の私の取り組みと、取り組みによる子どもたちの変化に関して記すこととする。

3. 担任当初の学級の様子

(1) 子どもたちの可能性

初めて子どもたちと会った時には、明るく元気で活発な印象を受けた。3年生ということもあり、学級の約半分の子どもは、大きな声で挨拶や返事ができており、元気があると感じた。また、前担任との業務内容の引き継ぎの際には、リーダーやサブリーダーになる可能性がある子どもが5名いると聞いていたので、活躍の場を与えて、力を伸ばしていきたいと思っていた。

学級全体で考えると、国語等での音読や歌はいつも大きな声で取り組むことができ、女子も男子も休み時間になると、外に出ていつも元気に遊んでいた。

特に驚いたのは、5時間目に20mシャトルランをやると伝えていても、体力を温存しておくことなく、休み時間に鬼ごっこをして遊んでいたことであった。さらに、5時間目のシャトルランでは、顔が赤くなるまで走っていた。このような姿を見て、改めて元気のよさを感じ、皆で何か一つのことに取り組みたら、すごい力を発揮するだろうと考えていた。

(2) 学習集団づくりにあたっての三つの課題

①喧嘩の多さ

一つ目の課題は、喧嘩が絶えなかったことである。1学期は、休み時間が終わって教室に戻ってくると、一週間に3回は一部の男子が喧嘩をして帰ってきていた。泣いている子ども、怒っている子どもがいて、仲良く遊ぶことが難しかった。

喧嘩の原因は、それぞれが自己中心的な遊び方をしていることにあり、お互いが納得しない時には暴力をふるうこともあった。保護者に連絡することも度々あった。

私は、喧嘩の度に子どもたちの話をよく聞くよう心懸けた。そうすると、子ども自身の気持ちが落ち着いてきて、自分の誤りを謝罪することができた。素直な子どもたちばかりで、自分の過ちに気づき、反省してすぐに仲直りできたことには救われる思いがした。しかし、衝動的に手がでてしまう子どももおり、そうした子どもへの対応について特別支援学級担当の教員と相談することもあった。

②ある子どもに対する否定的な見方

子どもたちのなかには、自分のことを見て欲しいと思い、担任の気を惹こうとする子どももいた。

授業中に学習用具を出さなかつたり、移動教室に行くための整列にも並ばないことがあったり、体育の授業ではその場に座り込んでしまったりして、担任の気を惹いているのではないかと思うことがあった。

このような態度で学校生活を過ごしていると、どうしても教師から注意を受けやすく、それを見ている周囲の子どもたちまでも、その子を否定的に見るようになってしまう。

そのため、「隣の席になると集中できない。」とか「あの子は、何もできないから期待しない。」などと言う発言も出てくるようになり、担任として悲痛な思いがした。

また、子ども本人も「僕は友たちが一人もいないよ。2年生の時に、一人できたけど、違うクラスになっちゃった。」と言うようになり、そのことも担任としては悲しかった。

したがって、この子の良さを学級の他の子どもたちに知ってもらったり、この子にも「やればできるんだ」という経験をさせ、自信をつけさせたいと思った。

③友人への関わり方に課題をもつ子ども

喧嘩が多かったこともあり、友人への対応が乱暴になり、仲良くしたいけれど友人と上手に関わるのが難しい子どもがいた。また、自分から友人に関わろうとせず、休み時間を一人で過ごす子どもも見受けられた。このような子どもは、学級全体で遊んでいる時も、その場にはいるが周囲と関わろうとせず、一人で周囲とは異なることをしていた。用があっても一人で黙って困っているだけで、誰かに声をかけることもなく教師が来るのを待っている感じだった。

今では、このような子どもたちも皆と一緒に遊んだり、話したりしたかったのだと思えるのだが、当時は、私自身も「一人が好きなんだろうな」と勝手に思っていた。

以上のように、担任当初の学級には、子どもたちの人間関係能力あるいは学習集団づくりに関する課題があった。クラス替え直後ということもあり、仲間意識も薄く、互いに助け合ったり、協力したりして仲良く過ごすことが上手くいかないう状態であった。

4. 遊びによる学級経営・学習集団づくりの取り組み

そこで、学級全体で遊ぶ活動を積極的に取り入れることにした。遊びになると子どもたち同士の距離感が縮み、皆で楽しみ合う経験ができ、仲間づくりにつながると思ったからである。何かやる度に喧嘩や問題が起こることは予想されたが、遊びを通して学級がよりよい雰囲気になることを期待した。

(1) スポーツ大会

3年生の7月、1学期のお楽しみ会としてスポーツ大会を企画した。ここでは、目標に向かって友人と協力し合うことを活動の主なねらいとした。その

過程で親睦が深まり、仲間意識が芽生えることを期待した。

スポーツ大会は、5人一組の班を構成し、班ごとの対抗戦を行うこととした。対抗戦の種目も班で話し合っ、一つの種目を提案するように伝えた。

子どもたちは大変意気込み、早くやりたいと言いながら準備を進めた。特に、種目を決める話し合いでは、リーダー性のある子どもが班を引っ張ってくれた。リーダーは各班の中心となり、班員の意見を聞き、班をまとめようと努力した。

話し合いは最初、自分のやりたいことを主張するものであったが、その後、少しずつ友人を気遣った意見が多くなっていった。

これは、私が「同じ班には運動を習っている人ばかりではないよね。運動が好きな人、苦手に思っている人など色々な人がいるから、まずは班のみんながやってみたいって思える種目にしようね。」と毎回、話し合いの前に学級全体に伝えていたことが契機になったのではないかと思う。学級の全員の合意を形成するよう話し合うことは、3年生の子どもたちにとって難しいことだが、班員全員を視野にいれた話し合いなら直接意見交換がしやすいと考えた。

そして、次第に、学級全体を考えた発言も出てくるようになった。例えば、「運動が得意な人も、苦手な人もみんなが楽しめる種目にした方がいい。」や「喧嘩が起きないようにルールにしよう。」とか「種目の内容を分りやすく説明しよう。」とか「地図記号を習ったから、鬼ごっこと組み合わせるとおもしろいと思う。」などという発言である。

話し合いの結果、「万歩計ふりふりゲーム」「二人三脚リレー」「ドリブルリレー」「地図記号ビンゴ鬼ごっこ」などを行うことになった。

スポーツ大会が始まると、子どもたちは皆盛り上がり、必死に取り組んだ。これまで良好な友人関係でなかったとしても、同じチームということで友人を一生懸命応援する姿があった。また、その種目に勝ったチームに、褒賞としてのプレゼントや賞状などを手作りで用意して渡すこともできた。

スポーツ大会終了後、勝ったチームは大いに喜び、負けたチームは悔しがっていたが、誰を責めるわけでもなく、皆楽しそうに笑っていた。そして何より、子どもたち同士の会話がこれまでよりも増えていることを実感することができた。

(2) 週2回の「共遊」の日

3年時以降、2年間ずっと、毎週火、水曜日の2回の昼休みを学級全員で遊ぶことにした。

水曜日の昼休みは「共遊」(きょうゆう)と言って、全学級が学級の子どもと教師と一緒に遊ぶ時間になっている。こうした活動は、名称は異なるが、他校でも取り組まれている。私の学級では水曜日だけでなく、火曜日の昼休みも一緒に遊ぶことにした。集会などで実施できないこともあるが、週に1日は学級全員で遊んできた。火曜日は学級のイベント係が企画した遊びを行った。週2回を皆で遊ぶことは、低学年の頃から始めていたようで、中学年以降も続けていこうと子どもたちと決めた。

遊びの内容は、アンケートなどをもって子どもたちが好きな遊びを順番に行ってきた。時には、私が中線ふみや缶けりなどの遊びを教え、新しい遊びにも挑戦した。

皆で一緒に遊んでいるうちに、一人で遊ぶことが多かった子どもも気の合う友人を見つけて、「共遊」の時間以外でも一緒に遊ぶようになっていた。

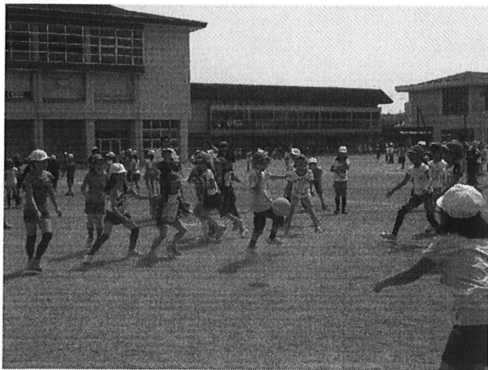


図1 「共遊」活動の様子

(3) 3年生での長縄大会

3年生の11月になると、学級は以前よりも少し落ち着いてきた。喧嘩の回数も減り、休み時間終了後に指導する場面も少なくなった。しかし、自分勝手に遊びのルールを作ったり、自分の思い通りにならないと衝動的に暴言を吐いたり、暴力をふるったりするなど自己中心的な子どもも、若干ではあるが、まだ存在した。このような状況において、校内長縄大会が実施されることになった。

この長縄大会は、本校で4年前から実施されている。本校の一年級の人数は30~40名であり、人

数が多いからこそ集団としてまとまることの大切さを体験させたいという思いから始まった大会である。したがって、学級の全員が参加して跳ばなければならないことになっている。

私は、この機会を利用して、回数や記録更新よりも学級の子どもたちに団結することの楽しさと素晴らしさを実感させたいと思った。

大会は、3分間に学級全員が八の字跳びを何回跳べるかを競う。そのため、運動が得意な子どもも苦手な子どもも一緒になって教え合うことができるように、練習は皆で行うこととした。最初は、回転して縄に入れずに困惑している子どもが10名ほどいた。時間をかけ、ようやく回転している縄に入ってみるが、縄を跳べないでいた。この頃の記録は最高が77回であり、2年生の時よりも大幅に記録下がり残念がる子どももいたが、「ラッキーセブンで何か縁起がいいからよしとしよう。きつともっとみんなは上達するから大丈夫。」と私は前向きに子どもたちを励ました。

それから、ほぼ毎日全員で練習した。苦手な子どもは上手に跳べないが、縄に引っ掛かっても諦めようとせず繰り返し挑戦した。上手く縄に入れずに焦って泣き出してしまふ子どももいたが、「負けない気持ちがあれば大丈夫。できると自分を信じて思いっきり跳んでごらん。」と励ました。そうすると、泣くのを止め、また跳び始めた。

こうした姿を見ていると、上手に跳べる子どもたちも「何で縄に入っていないんだよ。」とか「下手な人のせいで回数が伸びないよ。」などという否定的な発言をしなくなった。

下手でも学級の仲間が努力している姿と一緒に見ることにより、それまで他人の欠点を厳しく指摘していた子どもも、仲間の努力を認め、思いやることができるようになる。これが、全員で取り組むことの良さだと私は考える。

実際、学級全員で練習していると、「縄を見ると怖くなっちゃうから、見ない方がいいよ。前の人が真ん中までいったらスタートしてみて。」と、教師が予想もしない、跳び方のコツを教え合っている場面が見られた。「今日は、がんばったな~。おれも、みんなも。」と自分と友人を賞賛している子どももいて、よい雰囲気になってきた。

そして、このような友人との関わり方を「帰りの会」で賞賛すると、最初は全く跳べなかった子ども

も上達し、練習を重ねるごとに急激に記録が伸びるようになった。「回数をみんなで数えた方が盛り上がるし、リズムもよくなって跳びやすい。」という意見も出て、全員で大きな声を出して数えることにした。そうすると、学級としての一体感も感じられ、子どもたちの意欲もさらに高まり、「みんな～、長縄やりに行くよ。」と言って、休み時間のほとんどの遊びを長縄跳びで遊び、よりよい記録を出そうと全員が意気込むようになった。

よい調子で団結してきた段階で、練習を子どもたちに任せてみることにした。ところが、今度は気の緩みか、ふざけて学級の輪を乱す子どもが出てきてしまった。

こうした時は、全員で目標を確認したり、皆の気持ちを話し合うことを通して、一人で取り組んでいるのではなく、学級全員の気持ちが積み重なって取り組んでいることを意識させるよう指導した。

このような過程を経て、281回という、当初は想像していなかった記録を達成することができた。これは、校内優勝まであと2回と迫る素晴らしい記録であり、学級全員で喜び合った。

この長縄大会を通して、学級の子どもたちは大きな成長を遂げたように思う。例えば、友人を否定的にみることも減り、それまで友人への関わり方が苦手な子どもも積極的に友人に声をかけている場面が見られるようになった。「〇〇くんは、1年生の時から比べると、すごい上達したよね。すごいね!」「本当にすごい成長で、びっくりした。」などと、それまで否定的な態度で接していた友人を認め、肯定し、仲良く会話するようになった。私は、こうした姿に感心した。

友人から認められるという経験がその子にもよい影響を与え、その後、授業中の言動も少しずつ良くなり、集団で行動できるようになった。

以上のことから、長縄大会において、学級において協力する姿勢や互いに他者を認め合う心を育成することができたのではないかと考える。

また、急激に記録が更新されたことは、「やればできるんだ」という自信を与え、団結することの楽しさにもつながったと考える。

子どもたちが共通の目標に向かって力を合わせると、それは予想もしていなかった大きな力となり、子どもの成長をもたらすことができることを私自身も実感した。

(4) 遊びを工夫する話し合い

4年生となり、普段の遊びや長縄大会などを通して子どもたちの仲間意識が一層育ってきたように思う。また、それらの経験を通して、皆で遊ぶことが楽しいと言う声が増え、積極的に学級全体で遊ぶよう変化した。具体的には、「みんなで宝探し大会がしたいので、計画してもいいですか。」と自分たちで発案するようにもなった。

それまでは、教師が企画し、働きかけることが多く、子どもたちからの提案・意見に子どもの成長を感じた。このときは、皆で楽しく遊ぶことを活動の目標とし、楽しく遊ぶための工夫を考えさせ、計画を進めさせた。

学級全体で話し合った時、以下のような意見が出された。

- ・宝は隠しやすいようにメダルがいい。
- ・本物の宝に混じってにせの宝を用意しよう。本物が見つかったうれしさも倍増するし、にせの宝だった時のがっかりする気持ちも楽しさ変わるから。
- ・宝が見つからない時には困ってしまうから、ヒントを用意しよう。宝を隠す場所を決めたら、そのヒントを三択クイズにしてみたい。
- ・見つけた宝によって、ポイントを変えたらいいんじゃない。
- ・そしたら、メダルの色によってポイントを変えればいい。
- ・そうすれば、最後の逆転もありえるから頑張れるし、楽しそうだね。

以上のような意見が積極的に提起され、子どもたちの宝探し大会に対する意欲も高まった。そして、実際に大会を行ってみると、子どもたちのアイデアが生かされ、皆で楽しむことができた。

その他にも、学級内で紅白対抗運動会を行いたいという意見が出され、そのための計画を話し合うことになった。そして、まず競技種目の選定に関して話し合った。この時は、次のような意見が出された。

- ・ぼくはドッジボールが好きだから、ドッジボールをしたい。
- ・でも、ドッジボールだと暇になってしまう人がいるよ。みんなが楽しむためによ。

このときは、ドッジボールをやるか否かについて

の話し合いになってしまった。そこで、教師が種目を追加してその中から選択することを提案した。最終的には、子どもたちが種目数を増やすことになった。

場合によっては、教師が話し合いの意見を整理したり、新たに提案することが必要である。また、子どもたちが納得するよう、話し合いながら進めていくことも大切である。そうすることにより、学級全体で楽しく遊ぶことができる。

子どもたちは次第に建設的な話し合いができるようになっていった。以下は、話し合いの中で出された子どもの意見である。

- ・ドッジボールをやりたい人がいるので、ドッジボールをやることは決定しよう。
- ・でも、ボールを投げるのも苦手な人がいたり、当たると痛いから嫌だと言ったりする人もいるから、ボールを他の物に変えてみたらどうか。
- ・新聞紙のボールなら痛くないし、投げやすい大きさに作ればいい。
- ・私は、ボーリングをやりたい。でも、まっすぐ投げられない人もいるからどうしよう。
- ・人間ボーリングもあるよ。ボールを投げるのではなくて、じゃんけんに勝つと、人が座っていくゲームにしたらいい。
- ・運動会と言えば、玉入れでしょ。何か工夫できないかな。
- ・玉によってポイントを変えてみよう。
- ・障害物競争も楽しいよね。どんな障害にしようかな。

上記の意見からも分かるように、自分本位の発言をするのではなく、学級全員が楽しめる方法を探るという視点を持って話し合いを行うことができるようになってきた。そして、時間はかかるが、学級全員で話し合っていると、建設的なアイデアが次々に出されるようになった。

学級対抗紅白運動会は、白熱して盛り上がった。私には次のことが印象的であった。それは、縄跳びの二人跳びをした際、3年時に嫌っていたクラスメートに「ねえ、一緒にやってみる？」と自分から誘う姿が見られたことである。共に遊び、学習する中で、子どもの友人に対する考え方が変わっていたのではないかと思われる。

(5) 4年生での長縄大会

4年生の2月、この学級で臨む2回目の長縄大会が開催された。この大会に向けて気持ちを高めるために、事前に話し合いをもつことにした。

ここでは、学級全体で達成したい目標について話し合った。この時は、以下のような意見が出された。

- ・3年生の時には、うれしい思いもしたけど優勝できなかったからくやしい思いの方が強かった。だから、今年は優勝してみんなと最高の思い出を作りたい。
- ・優勝とかより、みんなで声を出したり、一生懸命練習したりしたい。みんなでがんばることが一番大事だと思う。
- ・このクラスでやる最後の長縄大会だから、絶対優勝したい。
- ・ぼくはあまり得意ではないけれど、みんなで記録を伸ばしていきたい。練習もがんばりたい。

話し合いの最後には、学級の3つの目標も決まった。3つの目標は次の通りである。

- ・みんなで声を出して、集中する。
- ・全員がつかえないで跳べるようにする。
- ・300回以上を跳んで、校内優勝する。

約1カ月半の間、上記の目標を一つでも多く達成するために練習した。練習開始当初は、運動の苦手な子どもが跳べなかったり、皆が集中するまでに時間が懸かり、思うように記録が伸びなかった。

しかし、リーダー的な存在の子どもが「もっと集中して」とか、跳べなかった友人にも「ドンマイ」と声をかけ、学級として励まし合いながら練習を進めることができた。

練習を重ねるうちに、3年時の最高記録281回に到達することができた。しかし、300回を超えることが大変難しく、思うように記録が伸びなかった。

こうした時は子どもたちの意欲も低下し、目標に対する意識も低下していたように感じた。また、毎日練習しているにもかかわらず、目標を達成できないことに対する苛立ちもあり、学級全体の雰囲気が悪くなっていたとも感じられた。

そこで、私は、長縄以外の遊びをして気分転換することを提案した。子どもたちも賛成してくれた。

気分転換をした後、長縄跳びに関して感じていることを発言し合う機会を設けた。以下に記すのは、その時の子ども間のやりとりである。

A 君：「Bさんは高くジャンプしすぎてから、もっと低くジャンプして、速く縄をぬけないと次の人が入りにくそうだよ。」

Bさん：「はい。」

C 君：「跳んだ後の態勢が悪いと、体に縄が当たって、次の人がつかえやすい。だから跳んだ後も、前に走り抜ける感じでいった方がいい。」

全 員：「そうだね。」

Dさん：「声を出していない人もいるから、もっとみんなで声を出していこうよ。」

Eさん：「でも、跳ぶので必死人もいるから、全員が声を出すのもなかなか難しいよ。」

Fさん：「先生が教えた跳び方を守っていない人がいるから、きちんと頭の中に入れて、跳ぼうよ。」

私が「これからみんなが思っていることお互いに発言する時間にします。でも、それは、その人のことをよくしようと思って言っていることなので、言い返さずに受け止めて欲しいと思います。また、相手がよくなることを信じて、思っていることを言ってみましょう。」と子ども全員に伝えた。

そうすると、上記のように互いに感じていることを言い合うことができるようになり、それらを肯定的に受け止めようとしてきた。また、意見交換を通して、学級全員で決めた目標を確認し合うこともでき、学級全員の気持ちがより高まっていくことが感じられた。



図2 長縄大会に向けての練習

意欲が高まったことにより、また記録が伸び始めた。最終的には、全員が引っ掛かることなく跳べるようになり、417回を跳び、最高記録で校内優勝を果たすことができた。

これは、最初に話し合い、3つの目標を決めたからこそ達成できたことであると思っている。校内優勝できたことは子どもの喜びとなり、一人一人の学級帰属意識及び仲間意識を高めることになった。

5. 2年間にわたる取り組みを終えて

(1) 取り組みの成果

4年生の2月に、学級に対する帰属意識ないしは満足度に関して、「この学級でよかったと思うかどうか」、またその理由に関して、子どもたちにアンケートを行った。アンケート結果では、100%の子どものがこの学級で良かったと回答している。また、その理由は以下の通りである（特徴的な回答を列挙した）。

- ・困っている時に誰かが声をかけてくれるから。
- ・新しい友人がたくさんできたから。いい友達がたくさんできたから。
- ・先生が勉強を細かく教えてくれたり、長縄大会では目標に向かってみんなががんばれたから。
- ・みんながやさしくしてくれたり、みんなと一緒に勉強や運動をやったりして、楽しかったから。
- ・クラスを盛り上げてくれる友達がいるから。
- ・全員の力を合わせて長縄大会で良い記録が出せたり、ドッジボールをしたりしてもチームワークがいいから。
- ・分らない勉強を優しく友達が教えてくれるから。
- ・長縄でたくさん跳べたし、少しきびしかったけど、みんなで励まし合っている時にいいクラスだと思った。堤先生もきびしい所もあったけど、勉強も行事も丁寧に教えてくれて分かりやすかった。
- ・一つの目標に向かってがんばってやって、できた時の達成感がとてもすごかった。
- ・話し合いでも色々な意見が出て、まとまるから。

また、15名程度の男女が放課後に学校へ再登校して一緒に遊ぶこともしばしば見かけるようになった。

これらのことから、遊びによる学級づくりにより、子どもたちの仲間意識を強くさせ、仲良くまとまりのある学級をつくることができたのではないかと考

えている。また、学級の構成員のよさを認め合うこともできるようになり、協力する姿勢が身に付いてきたようにも感じている。活発に話し合わせることを通して、互いを高め合おうとする態度も育ってきたのではないかと考える。

(2) 課題と感じていること

リーダー的な役割をする子どもが固定化してしまい、他の子どもが自主的にまとめようとしたり、リーダーがいなくても自主的、自発的にまとめようとする事ができず、これらの点が課題であると感じている。高学年になると、すべての子どもが下級生の面倒をみたり、小集団をまとめる機会が増える。すべての子どもにリーダー的な立場を経験させる必要性を感じている。

6. おわりに

担任当初に感じた3つの課題（喧嘩の多さ、ある子どもに対する否定的な見方、友人への関わり方に課題をもつ子ども）に関しては、この2年間でよりよい方向へ導くことができたのではないかと考えている。

遊びを学校での生活に活かすことを通して、この2年間で子どもたちの人間関係をよりよいものに築くことができたと考える。また、共通の目標をもって努力する経験や共に喜び合う経験が仲間意識を強め、さらには、居心地のよい学級づくりにつながることも実感できた。

課題は小さくないが、今回の経験を今後の学級経営にも活かしていきたい。

付記：「1」は丸山が執筆した。「2」から「6」は、堤が原稿を作成し、堤と協議の上、丸山が加筆・修正を施した。